



도시샤여대 한국학 국제학술회의
**The International Conference on Korean Studies
at Doshisha Women's College**
同志社女子大学 韓国学 国際学術カンファレンス

세계 시민성과 한국 디아스포라
Global Citizenship and Korean Diaspora
グローバル・シティズンシップとコリアン・ディアスポラ

[Panel 3]

역사문화
History and Cultural studies
歴史文化

[Panel 3-1]

이카이노 재일 조선인의 삶과 기독교

**The Involvement of Christianity in the Lives of Zainichi
in Ikaino**

猪飼野の在日朝鮮人の生活におけるキリスト教の関わり

박유경

Yukyung PARK 朴庾卿

후쿠오카대학

Fukuoka University 福岡大学

오카자키 료코

Ryouko OKAZAKI 岡崎 享子

나가사키외국어대학

Nagasaki University of Foreign Studies 長崎外国語大学

要旨

本稿は、ミンジン・リーの小説『파친코(パチンコ)』に描かれた在日朝鮮人の生活とキリスト教の関わりについて、猪飼野におけるキリスト教関係者のインタビューと現地調査、また文学作品や文献資料をもとに考察するものである。

猪飼野は、古代から百済などからの渡来人の集住地であった。1920年代以降は朝鮮人労働者が集住し形成された町であるが、1973年にその地名は行政上からは消えた。猪飼野は元々現在の大阪市東成区から生野区にわたる地域であった。生野区には現在も朝鮮半島にルーツを持つ住民が日本一多く集住しており、在日朝鮮人への差別と排除の歴史を物語る「記憶の場所」として象徴的な意味を持つ。猪飼野の在日朝鮮人とキリスト教の接点は多様に表れる。本稿ではインタビューや文献資料の事例をもとに、在日朝鮮人がキリスト教と出会う契機、教会の宣教活動、そして教会が果たしてきた社会的・文化的機能について考察する。しかし、積極的な宣教活動などを通して在日朝鮮人との深い関係性がみられるキリスト教ではあるが、実際在日朝鮮人の中でクリスチャンは少数派である。これらの状況を、ジェンダーや出身地域による宗教的活動の違いにも注目しながら、教会が在日朝鮮人の生活において果たす意味を考察する。

次に、在日朝鮮人がキリスト教をいかに解釈し、自らの思想に取り入れたのかについて在日朝鮮人文学を通して考察する。とりわけ、本稿では在日朝鮮人一世の詩人である金時鐘(1929～)が朝鮮近代詩人でありクリスチャンでもある尹東柱(1917～1945)の作品「序詩」と「肝」をキリスト教的な思想背景を考慮しながらいかに翻訳、または分析しているのかについて論じる。さらには、聖書との関連と尹東柱の「肝」との影響関係が見受けられる金時鐘の作品「夜の深さを 共に」をとりあげ、金時鐘がキリスト教や聖書の教えを土台としながら現代社会に対する批判を行なっている事例についてみていく。

keywords キーワード： 在日朝鮮人、在日朝鮮人文学、キリスト教、教会、アイデンティティ、金時鐘、尹東柱

초록

본고는 이민진의 소설 《파친코》에 그려진 재일조선인의 생활과 기독교의 관계에 대해 주목하여 이카이노(猪飼野)의 기독교 관계자 인터뷰와 현지 조사, 문학 작품과 문헌 자료를 바탕으로 고찰한다.

‘이카이노’는 고대부터 백제 등에서 건너온 사람들의 집단 거주지였다. 1920년대 이후 조선인 노동자가 집단 거주하며 형성된 마을인데 1973년에 행정구역상 그 지명은 사라졌다. 이카이노는 원래 현재 오사카시(大阪市)의 이쿠노구(生野区)에서 히가시나리구(東成区)에 걸친 지역을 가리킨다. 이쿠노구에는 지금도 한반도에 뿌리를 둔 주민이 일본에서 가장 많이 거주하고 있으며, 재일조선인에 대한 차별과 배제의 역사를 말해 주는 ‘기억의 장소’로서 상징적인 의미를 가진다. 이카이노의 재일조선인과 기독교의 접점은 다양하게 나타난다. 본고에서는 인터뷰와 문헌자료의 사례를 바탕으로 재일조선인이 기독교와 접하게 되는 계기, 교회의 선교활동, 그리고 교회가 완수해 온 사회적·문화적 기능에 대해 고찰한다. 적극적인 선교활동 등을 통해 재일조선인과의 깊은 관계성을 보이는 기독교이기는 하나, 실제 재일조선인 중에서 기독교 신자는 소수파이다. 이러한 상황을 젠더와 출신지역에 따른 종교적 활동의 차이에도 주목하면서 교회가 재일조선인의 삶에서 갖는 의미를 고찰한다.

다음으로 재일조선인들이 기독교를 어떻게 해석하고 스스로의 사상에 어떤 식으로 받아들였는지에 대해 재일조선인 문학을 통해 고찰한다. 특히 본고에서는 재일조선인 1세 시인인 김시종(1929~)이 조선 근대 시인이자 기독교인이기도 한 윤동주(1917~1945)의 작품 ‘서시’와 ‘간’을 기독교적인 사상 배경을 고려하면서 어떻게 번역 또는 분석하고 있는지 논하고자 한다. 나아가 성경과의 관련성과 윤동주의 ‘간’과의 영향 관계를 볼 수 있는 김시종의 작품 ‘밤의 깊이를 함께’를 분석하여 김시종이 기독교와 성경의 가르침을 바탕으로 현대사회를 비판하고 있는 사례를 살펴본다.

키워드 : 재일조선인, 재일조선인문학, 기독교, 교회, 아이덴티티, 김시종, 윤동주

I. はじめに

本稿は、朝鮮半島にルーツを持つ住民が日本一多い猪飼野における在日朝鮮人^[1]と基督教の関わりを考察するものである。本テーマに注目することになったきっかけは、ミンジン・リーの小説『파친코(パチンコ)』に描かれた在日朝鮮人の生活と基督教の関わりにある。主人公のソンジャが平壤出身の牧師イサクとの結婚を前に、信仰心もないままクリスチャンになれるとイサクに話す場面や、イサクが勤めることになった猪飼野の教会を訪れたある姉弟が牧師に相談する場面などは、基督教が信仰としてではないまた別の意味を持っているようにも見える。社会に強く根付いている儒教思想に影響されている朝鮮の人々が猪飼野で出会った基督教との接点、また彼らにとって教会はどのような存在であったらうか。現在生野区住居中の在日基督教関係者のインタビューと現地調査、文献資料をもとに分析する。さらに、猪飼野出身の在日朝鮮人文学作品を通してどのような影響があったのかも考察する。

II. 猪飼野と在日朝鮮人

1. 猪飼野の歴史的背景

猪飼野の「地名は港であることを示す「猪甘の津」に由来し」、百済などから渡来人の集住地であった。1920年代以降からは朝鮮からの労働者が集住し形成された町である^[2]。1973年に行政上の地名は消えたが、現在大阪市の東成区から生野区にわたる鶴橋駅・桃谷駅の南に至り、平野川の東部を含む一帯を指す。猪飼野という地名は、在日朝鮮人にとっては「記憶の場所」として象徴的な意味を持つ。『파친코』では「돼지와 조선인만 살 수 있는 곳(豚と朝鮮人だけが住めるところ)」^[3]であると書かれているが、差別と排除の歴史を語る象徴的な描写である。

2. 朝鮮人の流入と人口

朝鮮から日本への移住は、第1期(1910～1938)植民地支配期、第2期(1939～1945)強制連行による渡航、第3期(1945～1980年代末)解放後、第4期(1989年以降)ニューカマー期の4つに分けることができる^[4]。特に、工業都市であった大阪には多くの朝鮮人労働者が集まった^[5]。1952年8月現在生野区の外国人登録人口は25,652名、その中、朝鮮人は25,369人総数の99%を占めていた^[6]。2024年現在も大阪市内の外国人126,884名の中、最も多い29,531名(23.7%)が生野区に集住しており^[7]、国別内訳は2023年現在生野区に登録されている外国人28,504名の中18,750名が韓国及び朝鮮籍だという^[8]。

III. 在日朝鮮人と基督教の関わり

1. 基督教との出会い

インタビューと文献資料^[9]の事例によれば、在日朝鮮人の基督教との接点は血縁的継承、知人の誘い、社会運動など多様である。まず、李清一氏(在日二世)^[10]は、大邱出身

の祖父から三代に渡って信仰を継承しているという。「家父長制による継承」であると言いな
がらも「在日コリアンキリスト教徒として生きるという生き様、これが自分のアイデンティティそ
のもの」であると語っており、宗教が血縁と共に継承され、自分のアイデンティティを形成し
ていく事例である。一方、同じく血縁的継承による接点を持つ林芳子氏(在日二世)は、日
常の一部であった信仰生活が済州出身の夫と結婚してから舅がキリスト教に否定的であつ
たため、礼拝に通うことに葛藤を抱えていた。この二つの事例についてホン・ヤンヒ(홍양희)
は、「在日朝鮮人男性の家父長的文化と女性の宗教活動がぶつかり家庭内の葛藤」要因
となっており、「宗教が男性と女性という性別によって違う方式で実践されるというジェンダー
二元論的思考」によるものであると指摘している^[11]。次は林学周氏(在日一世、全羅北道出
身)の事例である。1928年渡航し下関から広島を経て大阪の工場で働くことになる。しかし、
工場で働きながら病気を患う絶望の中、工場の同僚に誘われて教会を訪れ信徒になった。
林学周氏は自分のキリスト教との接点について「絶望から聖書を学び、神様の光を発見し」
(林学周「証し」)と述べており、これはキリスト教が「救いの場」の役割として示されている典
型的な事例であるといえよう。最後に、呉光現氏(在日二世、両親が済州出身)^[12]は、学生
の時から在日韓国学生同盟の活動をしており社会活動・人権活動への思いを抱いていたと
いう。卒業後、民族学校の講師などの活動をしている中、教会が主催する生野地域の子ど
も会の立ち上げに誘われてキリスト教と出会う。この事例は教会が社会運動の実践の場とし
て機能していることを表している。

2. キリスト教の宣教活動

1920年代の半ば以降、朝鮮基督教連合公議会の要請と協議に基づき、カナダ長老教
会が在日宣教に加わることとなった。家庭訪問、トラクト配布後の伝道集会をはじめとし、
教育活動としては、主日学校、勉勵会、夏期聖書学校、査経会を開き、社会活動としては、
幼稚園、夜間学校を設立、在日朝鮮人の教育にも力を入れた^[13]。特に、幼稚園の開園に
ついては、「子どもと共に親たちに伝道に伝道を」という方針があった。「ほとんど幼稚園に
はノン・クリスチャンの家庭から通ってきてい」たが、幼稚園は「子どもを介して、教会と保護
者をつなぐ重要な役割を担う存在であった」^[14]。1934年から1939年は特高警察による宣
教師の動きの監視及び民族差別が厳しさを増していく中でも幼稚園と夜間学校を開設し、
ハングルを用いた民族教育を行うなど、宣教のためとはいえ、当時の在日朝鮮人の生活
に密着した活動を通して^[15]、生活と教育の場、民族のアイデンティティを支える役割を果た
していた。

3. 在日朝鮮人の生活におけるキリスト教の役割とクリスチャンの人口

このように、キリスト教や教会は「生活と教育の場」、「民族アイデンティティと心の支え」
としての役割も担ってきた。特に女性にとっては、家庭内葛藤を超えて「自己実現を果たす
場」でもあった。さらに、クリスチャンであることが雇用や住宅の契約などにおいて好印象を
与えた事例もあり^[16]、キリスト教は在日朝鮮人にとって生活する上で必要な信頼関係や
ネットワークを示す「社会関係資本」^[17]としての役割も果たしていたことがうかがえる。

しかし、1932年の調査によると、在阪朝鮮人の中クリスチャンは1.21%^[18]に過ぎない少
数派である。これについて飯田は^[19]、済州島出身が多かった大阪ではすでに親族ネット
ワークが形成されており、儒教的祖先祭祀や巫俗儀礼を通しそのネットワークを維持して
いるが、教会に属する者は済州島以外の出身が多く、伝統宗教的親族ネットワークから離
れている存在であると指摘している。

IV. 在日朝鮮人文学からみるキリスト教—在日朝鮮人一世詩人金時鐘を例に

1. 金時鐘が訳した尹東柱作品—「序詩」

次に、在日朝鮮人にとってキリスト教がいかなる役割を担ってきたのか、または信者ではない立場としてもいかにキリストの教えを受け入れ、解釈していたのかについて在日朝鮮人文学を通して考察する。とりわけ、本稿では在日朝鮮人一世の詩人である金時鐘(1929～)^[20]が2000年前後に朝鮮近代詩人でありクリスチャンでもある尹東柱(1917～1945)の朝鮮語の詩集『空と風と星と詩』を日本語に翻訳し、2004年に金時鐘訳『空と風と星と詩』^[21]を発表したことに着目する。なぜなら、この翻訳作業は、金時鐘にとって尹東柱作品が持つキリストの教えを解釈するだけではなく、さらにはキリスト教そのものと向き合う過程であったと考えられるからである。したがって、ここでは、金時鐘がいかに尹東柱のキリスト教的背景を解釈したのかについてみていく。さらには、その後発表された金時鐘の創作詩にもキリスト教の教えと重なり合う点が見受けられることから、金時鐘の文学作品とキリスト教との関わりについてみていく。

『空と風と星と詩』は複数の訳者によって翻訳されているが、金時鐘が翻訳したものは2004年版と2012年の文庫本版^[22]があり、文庫本の巻末には金時鐘による尹東柱作品の評論「解説に代えて—尹東柱・生と詩の光芒」^[23]が収録されている。

金時鐘はこの論考において、本詩集の初めに収録されている最も有名な作品の一つである「序詩」について言及している^[24]。金時鐘は、この「序詩」の第1節「죽는 날까지 하늘을 우러러」の「하늘」を「天」と訳した。これに関し金時鐘は、その他の尹東柱作品に頻出する「하늘」の訳を「空」の場合と「天」の場合に訳し分けるべきだと述べ、「序詩」の「하늘」を「天」と訳す理由について、「윤・ドンジュは敬虔なクリスチャンでありました。...中略...「死ぬ日まで天を仰ぎ」なんです。平俗な仕草であっても、自分を見つめ直すとき仰ぎ見るのは「天」という概念につきうごかされているときです^[25]」と述べている。

このように、金時鐘は尹東柱の生活やキリスト教の思想を持っていたことを考慮しながら、「天」と訳したと述べている。これはつまり、金時鐘が尹東柱作品を単に日本語に置き換えるだけではなく、「自分を見つめる」ための対象として「天」があるというキリスト教の教えを認識し、それにふさわしい詩語を選択したと捉えることができる。

2. 金時鐘が解釈する尹東柱「肝」と聖書との関わり

金時鐘は「序詩」だけでなく、聖書が土台になっている尹東柱の作品「肝」に関してより深い考察を行っている。この「肝」は、「ぼく」が肝を鷹に食べられる運命にある「プロメテウス」を哀れむという作品である。金時鐘はこの作品を聖書との関連が深く見られるとし、人間に神の火を与えたプロメテウスがその天罰として毎日鷹に肝を食べられるというギリシャ神話が下地にあると言及している^[26]。続いて、神話においてその後プロメテウスは復活するが、尹東柱の「肝」では、プロメテウスが「石臼に吊るされ」「果てしなく沈殿する」^[27]という結末を迎えることに着目している。金時鐘はこの結末について、「それでもプロメテウスは蘇るのだろうか」という尹東柱の「救われるべき自分への微かな希いを、プロメテウスに託したとみるのがこの作品の真意」とであると指摘しながら、未来が見えず報われない現実に思い悩んでいる尹東柱の心情を通して読み解いている^[28]。つまり、金時鐘は、尹東柱が聖書や神

話の登場人物が置かれた境遇を当時の自らの境遇と照らせ合わせながら人生について考えていたと解釈したのである。

3. 金時鐘の作品「夜の深さを 共に」からみえるキリスト教的背景

尹東柱の作品「肝」に登場するプロメテウスやそれにまつわる神話や聖書の断片は、金時鐘の作品にも見受けられる。それは、2018年に発表された金時鐘の第8詩集『背中の地図』^[29]に収録されている作品「夜の深さを 共に」においてである。『背中の地図』は、東日本大震災をテーマに編まれた詩集である。「夜の深さを 共に」には、登場人物「私」が震災や津波の被害、原子力発電所を目撃した内容が描かれている。キリスト教との関連が直接的に表れているのは、作品の始まりの「私は見ました。／ノアの洪水を今に見ました」の箇所である。つまり、金時鐘は震災、あるいは津波を聖書に登場する「ノアの洪水」と表現したのである。このことについて、金時鐘は、震災を受けて自らの言語観や世界観が崩れたと言及しており、この状況を聖書の「ノアの洪水」と喩えたということが分かる。

さらに、「私は見ました。／...中略...／神々がひそめてきた天外の火を／利便さに代えた人智の驕りを、／神々の深い溜息に渚がたわみ／迫り上がった海が山濤となって／いつときに列島の背を打ったのです」と作品は続く。前述したように、尹東柱の「序詩」の「天」は、神の領域の「天」であった。この「天」は、『背中の地図』において頻出する詩語であり、やはり同じ意味合いで用いられている。とりわけ、「神々がひそめてきた天外の火」をプロメテウスの神話と関連づけて読んでみると、聖書の世界と現実世界との対比関係が浮かび上がってくる。「天外」は「神の領域の外」という意味で使われており、これはプロメテウスが人間に与えた「火」を意味するといえる。また、その後には「ゆめゆめ原子力の青い火に／未来があってはなりません」と続く。この「青い火」とは、詩集全体を通して繰り返し使用される原子力発電所の比喩表現である。この対照的な二つの「火」の描かれ方に留意すると、プロメテウスが人間に「火」を与え、その罪を自ら負わされたことと、現代社会で利益を追求したゆえに「青い火」である原子力発電所を作り、その仕打ちとして災害が起きたことが対置されながら描写されていることが分かる。このように、作品「夜の深さを 共に」では、二重の意味を持つ「火」を使用した金時鐘独自の社会批判がなされているのである。

以上のことを整理すると、金時鐘は尹東柱の作品に描かれたプロメテウスを尹東柱の心的状況を表すモチーフであると解釈した。この時、キリスト教とは尹東柱にとって個人の生きる道を自問自答する内向的な方向性を持ったものであったといえる。その一方で、金時鐘の創作詩である「夜の深さを 共に」における神話や聖書の断片は、個人的な自己投影を行うモチーフであるというよりも、社会批判のために用いられている。これらの違いはあるにせよ、キリスト教の教えが尹東柱と金時鐘それぞれの現状を訴え、現状を批評する際の手段として用いられていることは共通している。このように、尹東柱と金時鐘の作品を、キリスト教との関わりから読み解くことができるのである。

V. おわりに

在日朝鮮人にとってキリスト教や教会は、宗教的意味を持つ場所でもあり、与えられた状況の中で情報コミュニティー^[30]、心の支え、社会的実践の場、癒しの場であり、彼らが今を生きるための空間となっている。『파친코』でソンジャが信仰心なきままクリスチャンになれると言い、クリスチャンとして生きてきたように、在日朝鮮人にとってキリスト教はクリスチャ

ンとして生きる「自ら選らんだアイデンティティ」であり、「生きるための選択」である。

このようなキリスト教や教会は、70年代の就職差別撤廃運動や80年代の指紋押捺拒否運動など、在日朝鮮人社会において大きな役割を果たして来たが、在日朝鮮人社会の変化に伴いその役割も変化しつつある。例えば、大阪教会における日曜礼拝には青年層の参加が少なく、高齢者層が礼拝の中心となっていた。また、教会が運営している老人大学には、国籍を問わず多くの方、クリスチャンではない方も参加しており、在日社会の高齢化に対応した活動を行っている。納骨堂も運営しているそうだが、特に無縁故者の納骨管理や追悼礼拝を実施し、宗教としての機能を超え、在日朝鮮人にとって新たな「記憶の場所」としての役割を担っている^[31]。一方、カトリック生野教会では、かつて修道女が使っていた建物が、今は町の外国人難民のシェルターとして使われており、教会が地域福祉の担い手としての機能も果たしていた^[32]。生野区は現在多様な外国籍の住民が増加している。教会は今後も社会的マイノリティのための空間として重要な役割を果たしていくだろう。

また、尹東柱や金時鐘の事例から、キリスト教の教えや聖書の教えが実践的な生活や心の葛藤と結びつき、それぞれの現実的な状況や置かれた立場を把握するための手段となったということが明らかになった。とりわけ金時鐘の場合は、キリスト教信者ではない立場であるものの、文学作品を創作する際にキリストの教えを引用し、あるいはその世界観を取り入れながら客観的に自らの立ち位置や現状を把握したといえる。ここに、信仰の対象ではないまた別の在日朝鮮人とキリスト教との関わりを見てとれるのである。

[1] 本稿では、朝鮮半島にルーツを持ちながらも日本で生活している者を「在日朝鮮人」と称する。

[2] 大阪コリアンタウン歴史資料館の展示資料参照。

[3] 이민진《파친코1》신승미 옮김, 인플루엔셜, 2022, 163. 日本語訳は筆者による。

[4] 강재언, 김동훈『재일한국조선인: 역사와 전망(在日韓国朝鮮人: 歴史と展望)』소화, 2000; 장윤수 「재일한인 집거지역 사회적 실태조사-신주쿠와 이쿠노를 중심으로-(在日韓人の住居地域の社会的実態調査—新宿と生野区を中心に)」『한국동북아논총』제32집, 2004, 385再引用。

[5] 金耿昊(2023)「地域から考える在日朝鮮人史と教会史：関東大震災から100年をおぼえて(2)在日朝鮮人社会のはじまり」『福音と世界』78(5), 新教出版社 [編], 63-64。

[6] 生野区創設十周年記念事業実施委員会(1953)『生野区誌』大阪市生野区役所, 22。

[7] 大阪市資料「大阪市各区における外国人住民の比率および増加率」

[8] 大阪市資料「大阪市外国人住民国籍別区別人員数」

[9] 文献資料は、石川亮太(2025)『ある在日韓国人クリスチャン家庭の百年 大阪・林家の生活史』かんよう出版。以下、林芳子氏については129頁、林学周氏については44-45頁を参照。

[10] 現在、在日韓国基督教会館名誉館長、在日韓国奨学会代表理事、関西いのちの電話理事長など。祖父は1928年京都へ。1936年に京都で教会と繋がる。1944年頃大邱に戻る。

[11] 홍양희 「식민지시기 재일조선인 여성과 교회 공간의 구성 (植民地期の在日朝鮮人女性と「教会」空間の構成)」『여성과 역사 37』2022, p62。

[12] 現在、聖公会生野センター総主事、在日本済州4・3犠牲者遺族会会長、在日大韓基督教会青年会全国協議会代表委員歴任。

[13] 吳寿恵(2012)『在日朝鮮基督教会の情勢伝道たち77人のバイブル・ウーマン』新教出版社, 77-87。

[14] 同上書, 84-86。

[15] 同上書, 147。

[16] 石川亮太, 上掲書, 92及び吳寿恵, 同上書, 88-89。

[17] 水谷浩志(2020)「ソーシャル・キャピタルとしての宗教と共生理念—臨床宗教師の事例から」『共生文化研究』5, 東海学園大学, 41-60。

[18] 朴慶植(1982)『朝鮮問題資料叢書在日朝鮮人の生活状態(解放前)』アジア問題研究所, 76。

- [19] 飯田剛史(2002)『在日コリアンの宗教と祭り』世界思想社, 296.
- [20] 金時鐘は1929年に植民地朝鮮に生まれ、幼少期を済州島で過ごした。彼は日本語教育を受けた皇国少年であったが、1945年8月15日に解放を迎えると、自ら朝鮮人であることを自覚した。1948年に済州4・3事件(以下、済州4・3)が契機となり、翌年1949年に渡日して大阪の朝鮮人集落である猪飼野で住み始め、その後は関西を転々としながら現在に至るまで日本語で文学活動を行っている。
- [21] 尹東柱著、金時鐘訳(2004)『空と風と星と詩:尹東柱詩集』もず工房.
- [22] 尹東柱著、金時鐘訳(2012)『空と風と星と詩:尹東柱詩集』岩波書店.
- [23] 金時鐘「解説に代えて—尹東柱・生と詩の光芒」上掲書, 149-183.
- [24] 大村益夫は、「朝鮮文学の翻訳—尹東柱『序詩』の翻訳を中心に」において、複数にわたる「序詩」の訳について、その特徴や背景について比較検討している(大村益夫「朝鮮文学の翻訳—尹東柱『序詞』の翻訳を中心に」徐勝、小倉紀蔵編(2013)『言葉のなかの日韓関係:教育・翻訳通訳・生活』明石書店, 146-159.
- [25] 金時鐘、細見和之、藤井たけし他(2004)「日本語の未来、詩の未来」特集 連続講座「国民国家と多文化社会」第14シリーズ コリアン・ディアスポラ—交差する多様な表現『立命館大学言語文化研究』16巻1号、立命館大学国際言語文化研究所, 59.
- [26] 尹東柱著、金時鐘訳(2012)『空と風と星と詩:尹東柱詩集』岩波書店, 180.
- [27] 本文は、以下の通りである。「プロメテウス 哀れなプロメテウス／火を盗んだ咎めで石臼を吊るされ／果てしなく沈殿する プロメテウス」。
- [28] 尹東柱著、金時鐘訳(2012)『空と風と星と詩:尹東柱詩集』岩波書店, 182.
- [29] 金時鐘(2018)『背中の地図』河出書房新社.
- [30] 今回インタビューに応じた全員は、在日朝鮮人にとって教会は「情報を得るコミュニティ」であると口を揃えた。
- [31] 日曜礼拝に参加、在日大韓基督教会大阪教会の主任牧師李明信氏のインタビューによる。
- [32] カトリック生野教会の神父申城吉師のインタビューによる。

참고문헌

- 양미영, 「이민진의『파친코』에 나타난 기독교와 미국 표상」, 『인문학연구』통권 127호, 2022, 109-39쪽.
- 오태영, 「경계 위의 존재들 - 이민진의『파친코』를 통해 본 재일조선인의 존재 방식」, 『현대소설연구』제82호, 2001, 377-405쪽.
- 이민진《파친코1》신승미 옮김, 인플루엔셜, 2022.
- 이민진《파친코2》신승미 옮김, 인플루엔셜, 2022.
- 장윤수, 「재일한인 집거지역 사회적 실태조사-신주쿠와 이쿠노를 중심으로-」, 『한국동북아논총』제32집, 2004, 381-404쪽.
- 홍양희, 「식민지시기 재일조선인 여성과 ‘교회’ 공간의 구성」, 『여성과 역사』37, 2022, 35-70쪽.
- 金時鐘(2018)『背中の地図』河出書房新社.
- 尹東柱著、金時鐘訳(2004)『空と風と星と詩:尹東柱詩集』もず工房.
- 尹東柱著、金時鐘訳(2012)『空と風と星と詩:尹東柱詩集』岩波書店.
- 伊地知紀子(2022)「大阪と在日コリアン」『阪神都市圏の研究』ナカニシヤ出版, 59-84.
- 金耿昊(2023)「地域から考える在日朝鮮人史と教会史: 関東大震災から100年をおぼえて(2)在日朝鮮人社会のはじまり」『福音と世界』78(5), 新教出版社 [編], 62-67.
- 吳寿恵(2012)『在日朝鮮基督教会の情勢伝道たち 77人のバイブル・ウーマン』新教出版社.
- 生野区創設十周年記念事業実施委員会(1953)『生野区誌』大阪市生野区役所, 22.
- 石川亮太(2025)『ある在日韓国人クリスチャン家庭の百年 大阪・林家の生活史』かんよう出版.
- 大阪教会(1979)『在日大韓基督教大阪教会55年史』大阪教会.
- 飯田剛史(2022)『在日コリアンの宗教と祭り』世界思想社.
- 朴慶植(1982)『朝鮮問題資料叢書 在日朝鮮人の生活状態(解放前)』アジア問題研究所.
- 李清一(2015)『在日大韓基督教教会宣教100年史1908-2008』かんよう出版.
- 大阪市資料「大阪市各区における外国人住民の比率および増加率」<
[https://www.city.osaka.lg.jp/shimin/cmsfiles/contents/0000431/431477/03_kakuhiritsu\(R6\).pdf](https://www.city.osaka.lg.jp/shimin/cmsfiles/contents/0000431/431477/03_kakuhiritsu(R6).pdf)> (2025年8月23日閲覧)
- 大阪市資料「大阪市外国人住民国籍別区別人員数」<
https://www.city.osaka.lg.jp/shimin/cmsfiles/contents/0000431/431477/02_kubetsukokusekibetsu.pdf> (2025年8月23日閲覧)

[Panel 3-2]

“조선어로 말할 수 있는 세계”와의 왕래 -가지무라 히데키(梶村秀樹)에 의한 현대어학원(現代語学塾)에서의 활동을 중심으로-

Interaction with the "Korean Language World":

Kajimura Hideki's Activities at the Gendai Gogakujiyuku

「朝鮮語で語られる世界」との往来:現代語学塾での梶村秀樹の活動をめぐって

오츠키 가즈야

Otsuki Kazuya 大槻和也

도시샤대학

Doshisha University 同志社大学

要旨

1970年、金嬉老公判対策委員会事務所の隣に発足した現代語学塾。本報告では発足以来、梶村秀樹が積極的に関わり続けた現代語学塾での活動、および1970年代以降の梶村による朝鮮語学習に関する議論に焦点を当てる。それを通じて、日本人が朝鮮語に触れることの意味を梶村がどのように考えていたのかを探究する。

現代語学塾の機関誌と関係者によるインタビューを通じて、梶村が語学塾の授業においてどのような教材を活用していたのか、梶村が現代語学塾をどのような空間だと考えていたのかについて、明らかにした。また、梶村は朝鮮人同士が朝鮮語で話し、朝鮮語で交わされる主体的な意思伝達の空間を「朝鮮語で語られる世界」と呼び、この世界に積極的に触れていくことに独自の意義を見出していた。そして日本人が朝鮮語を学ぶことで、「日本語につきまとう独善」を克服する可能性に対し積極的な価値を見出していた。

さらに、1970年代におけるキーセン観光反対運動に寄せた文章を読むことで、梶村自身が朝鮮語学習を通じて垣間見た「朝鮮語で語られる世界」を通して、日本社会、日本人男性に対する独自の批判を行っていたことも明らかにした。加えて、梶村の朝鮮語に関する議論は梶村が提唱していた内在的発展論の論法とも共通性をもつことを考察した。

キーワード：梶村秀樹、現代語学塾、朝鮮語学習、朝鮮語で語られる世界、日本語につきまとう独善

초록

1970년 김희로 공판대책위원회 사무소 옆에 발족한 현대어학원. 본고에서는 발족 이래, 가지무라 히데키가 적극적으로 관여한 현대어학원에서의 활동, 및 1970년대 이후의 가지무라에 의한 조선어 학습에 관한 논의에 초점을 맞춘다. 그를 통해 일본인이 조선어를 접하는 의미를 가지무라가 어떻게 생각했는지를 탐구한다.

현대어학원의 기관지와 관계자에 한 인터뷰를 통해 가지무라가 어학원 수업에서 어떤 교재를 활용하고 있었는지, 가지무라가 현대어학원을 어떤 공간이라고 생각했는지에 대해 밝혔다. 또 가지무라는 조선인끼리 조선어로 말하고 조선어로 나눠지는 주체적인 의사전달의 공간을 '조선어로 말할 수 있는 세계'라고 부르며 이 세계를 적극적으로 접해 가는 것에 독자적인 의의를 찾아내고 있었다. 그리고 일본인이 조선어를 배우는 것을 통해 '일본어에 따라다니는 독선'을 극복할 가능성에 대해 적극적인 가치를 발견하고 있었다.

게다가 1970년대 기생 관광 반대운동에 전해진 문장을 읽음으로써 가지무라 자신이 조선어 학습을 통해 엿볼 수 있는 '조선어로 말할 수 있는 세계'의 관점에서 일본 사회, 일본인 남성에게 대한 독자적인 비판을 하고 있었던 것도 밝혔다. 또한 가지무라의 조선어에 관한 논의는 가지무라가 제창하고 있던 내재적 발전론의 논법과도 공통점을 갖는 것을 고찰했다.

키워드 : 가지무라 히데키, 현대어학원, 조선어 학습, 조선어로 말할 수 있는 세계, 일본어에 따라다니는 독선

I. はじめに

本稿では、朝鮮史研究者・梶村秀樹が朝鮮語の学習についてどのように考え、現代語学塾でどのような活動をしていたのかについてみていく。現代語学塾における梶村の活動とその意味についてはほぼ触れられることのなかった領域である。

現代語学塾に関しての研究論文は、山本興正(2025)¹がある。『常緑樹』の共同翻訳事業について詳細が分かり興味深い半面、語学塾全体を対象とするため、やや記述が概略的である。本稿では梶村の関わりに焦点を当て考察していく。また、塾生による機関誌『글방—塾報—』の中で活動回顧がなされているので、それらも参考として梶村の活動を跡づけていく。

研究資料は、金嬉老裁判や朝鮮語学習に関する梶村秀樹の論考、先に述べた現代語学塾が発行していた機関誌である『글방—塾報—』などを活用する。そしてそれらの文字資料では再現不可能な梶村の当時のあり様を再現するための史料として、現代語学塾関係者へのインタビュー資料²を活用している。

II. 現代語学塾のはじまり

現代語学塾の発足は、金嬉老裁判と不可分の関係にある。公判初期には、金嬉老公判対策委員会は弁護士事務所と同じ場所だったが、後に事務所を独立させることになった。そこで、梶村がその空間を使って何かやろうと提案し、その結果、朝鮮語の語学塾と思想講座が生まれたのがはじまりである。朝鮮語講座は春期と秋期の年2回に分けて開講していた³。

1970年7月31日に金嬉老公判対策委員会事務所を移転したが、その際に後の思想講座となる「研究会」や「語学塾」を行なう計画がなされている⁴。1970年10月8日の現代語学塾発足と同時に梶村は講師および運営委員として参加し、1988年8月末の入院の直前まで務めた1988年4月期の朝鮮語中級クラスの担当分まで、生涯語学塾に関わり続けた⁵。

1970年10月にはじまった現代語学塾第1期生の倉橋葉子は、当時の講師は大村益夫であり、童話『うさぎの肝』や同年11月13日に焼身自殺した全泰壹についての新聞記事の読解などを行ったという⁶。他にも趙明熙の「洛東江」を教材に使ったり、李陸史の「青葡萄」

¹ 山本興正(2025)「人間性回復のための朝鮮語学習：現代語学塾小史」『思想史研究』思想史・思想論研究会、32号、pp. 274-296。

² 本稿に関わって、筆者はこれまでに以下のインタビューを行っている。2021年9月15日(および2024年4月25日)に現代語学塾塾生であった倉橋葉子氏に、2021年12月31日に現代語学塾塾生であった米津篤八氏に、2022年3月13日に現代語学塾塾生であった安岡千絵里氏に、2022年4月4日に信愛塾(現在はNPO法人在日外国人教育生活センター・信愛塾)センター長兼理事の竹川真理子氏、および梶村秀樹の神奈川大学での授業聴講経験者であり、現在は信愛塾理事の大石文雄氏に、2022年4月5日に現代語学塾関係者であった谷口豊、権丈眞弓両氏にインタビューを実施した。この場を借りて感謝申し上げます。

³ 発足については、松山昌一(1975年8月17日)「現代語学塾の歩み」『글방—塾報—』1号、現代語学塾、p. 22~26、および三橋修(1989)「金嬉老公判対策委員会の中で」『故梶村秀樹先生をしのぶ市民の集い』実行委員会編『追悼・梶村秀樹さん』ジェルワードシステム 株式会社文栄、pp. 53-54参照。

⁴ 「金嬉老公判対策委員会の事務所移転」(1970年9月10日)『金嬉老公判対策委員会ニュース』17号、p. 3。

⁵ 「第三章 年譜」(1990)梶村秀樹著作集刊行委員会編『梶村秀樹著作集 別巻 回想と遺文』明石書店、p. 288。および「現代語学塾20年の歩み 第1期(1970年10月期)～第40期(1990年4月期)」(1990年9月23日)『글방—塾報—』6号、現代語学塾、p. 29。

⁶ 倉橋葉子氏へのインタビュー(2021年9月15日)より。

の翻訳を授業中に課されたりもしたという⁷。

現代語学塾の教育スタイルは、テキストの難易度で初、中、上級への区分はあるが、ハングルの読み方や初歩的な文法を学んだあと、直ちに朝鮮語テキストの翻訳にとりかかり、そこで出てきた文法事項や単語について説明していくというものであった。

Ⅲ.「朝鮮語で語られる世界」に共同で触れる：現代語学塾での活動

1974年に行われた「朝鮮語で語られる世界」という講演の中で、梶村は朝鮮について考える中で、それまで日本語を通じて理解しイメージしてきたものと、「朝鮮語によって語られる言葉の中にあるイメージ、世界」との違いを発見したという。在日朝鮮人との出会いの中でも、日本語で会話する際と朝鮮語で語り合う姿に違いがあったという。それは、日本語で語られる世界における朝鮮のイメージは気の毒な犠牲者という「受け身の立場」でしかないが、朝鮮語で語られる世界は、「在日朝鮮人の生活も含めて、朝鮮人が主体であるような世界」である。日本語の世界は「朝鮮人を客体化する世界」であり、朝鮮語で語られる世界は「朝鮮人が主人公であり主体である世界」であり、「朝鮮語でやりとりされる人間関係と独自の文化の領域」があることを指摘している⁸。

朝鮮人が主体となる「朝鮮語で語られる世界」に朝鮮語学習を通じ触れることで、少しでも「当時の朝鮮民衆の真実の姿」に近づくことが可能であり、「民族運動のいわば思想として息づいている」朝鮮語の世界に触れる重要性を梶村は説いている。ゆえに朝鮮語学習を通じて「本当の意味で自分の朝鮮語の世界を見つけ出す」ことが重要であると締めくくる⁹。

この講演からは、梶村が「朝鮮語で語られる世界」に朝鮮人が主体であり主人公である独自の世界を見出し、朝鮮に対する積極的なイメージ獲得のためにも朝鮮語学習が必要と考えていることが分かる。梶村が現代語学塾で朝鮮語を教える際の問題意識がうかがえる。

とはいえ梶村は、自身のそうした問題意識を学習者に押しつけるようなことはしなかったようである。安岡千絵里によると、梶村はどんなきっかけや理由であっても、朝鮮語に関心をもつ人々を歓迎したという¹⁰。特定の目的を求めたり、特定の問題意識を強要するような接し方はせず、学習者の自発性と主体性に信頼をおく梶村の関係のとり方が分かる。

現代語学塾で梶村は、夜学の朝鮮語学習の講師の他に、思想講座においては朝鮮民族解放闘争の歴史像¹¹を講演した。谷口豊によると、梶村は語学塾の運営全般にもコミットしており、講師として以外にも講師の紹介などをして思想講座に関わっていたという¹²。また梶村が受けもった朝鮮語自主クラスでは、塾生と『常緑樹』の共同翻訳作業¹³を行なっ

⁷ 倉橋葉子氏への追加インタビュー(2024年4月25日)より。

⁸ 梶村秀樹(1992)「朝鮮語で語られる世界」『梶村秀樹著作集第1巻 朝鮮史と日本人』明石書店, pp. 79-82参照(初出は1975年)。これは、神奈川大学での「朝鮮語開講記念講演会」での講演録である。

⁹ 同上, pp. 86~88参照。

¹⁰ 安岡千絵里氏へのインタビューより(2022年3月13日)。

¹¹ 梶村秀樹(1991年5月29日)「間島パルチザンについて」『글방—塾報—』8号、現代語学塾, pp. 1~36。これは1975年3月22日に行なわれた現代語学塾の思想講座講演録である。

¹² 1981年12月に行われた思想講座「在日朝鮮人獄中者救援センターの発足と取り組み」の講師である韓平治を紹介したのも梶村であるという。谷口豊氏へのインタビューより(2022年4月5日)。

¹³ 沈薫著、梶村秀樹・現代語学塾常緑樹の会訳(1981)『常緑樹』龍溪書舎。

た。

現代語学塾の発足から10年を迎え書かれた文章の中でも、梶村は自主運営の小さな塾が存続してきた理由として、参加者が朝鮮語を学ぶ理由を互いに語り合い、「民衆の日常生活文化の基調音から朝鮮を理解すること」という共通項をもって朝鮮語学習にのぞんでいたから、と述懐している¹⁴。

梶村が授業で使った教材のうち、韓国の女性労働者である宋孝順が記した現場手記である『서울로 가는 길』¹⁵は1982年8月に韓国で出版されたが、すぐさま発売禁止に近い状態におかれた書籍である¹⁶。『서울로 가는 길』のみならず、教材選定において梶村は、韓国の女性労働者の手記や体験談を多く採用していることが分かる。これが示唆することは梶村が韓国の女性労働者の生き様に「民衆」としての姿を見出しているということであろう。韓国における従属資本主義の展開の中で女性が男性より劣位で悪条件の労働に従事させられている状況と、それに対する抵抗に注目していることは明確である。梶村がジェンダーの視点をもって教材選定していたか否かは不明だが、教材選定において梶村が韓国の女性労働者の生に積極的意義を見出していたことは十分に推測できる。韓国の女性労働者に注目し続けた梶村の着眼点は、梶村の歴史学を男性の歴史学としてのHisstoryにとどめることなく、女性の歴史学としてのHerstoryに接続する可能性を秘めたものであろう。

他にも近代化が進む農村での農民のあり方、労働者に夜学をする教員の地道な活動などに注目した教材が見受けられる。いずれも、軍事独裁政権が主導する資本主義化・近代化の進展の中でその動きに抗う人々の営みに注目しているといえる。

以上のように、梶村が現代語学塾で行ってきたことは、「朝鮮語で語られる世界」に共同で触れ、その感性を共同で培い養っていく営為であることが分かる。日本人にとって「朝鮮語で語られる世界」に触れ、その主体的な朝鮮イメージに触れることは、日本語で語られてきた朝鮮イメージを覆す上での重要な鍵となる。

IV. 「日本語につきまとう独善」を克服する：日本人が朝鮮語を学ぶ意味

次に、日本人が朝鮮語を学ぶ意味についてより深く考えてみたい。これは大学における朝鮮語学習の意味についての文章であるが、ここで梶村は日本人が朝鮮語を学習する意味について以下のように書いている。

(日本人である：引用者注)私たちが朝鮮語を学ぶということが、うばった朝鮮語を朝鮮人に返すということであり、日本語とそれにつきまとう独善をのりこえた真のつきあいの第一歩なのである。ほんの初歩的なものであれ、朝鮮語を学ぶことを通じて、朝鮮人の思いを内側から感じとることができるようになり、そのこと

¹⁴ 梶村秀樹(1990年5月)「“くるばん”の日常—現代語学塾の10年間—」『글방—塾報—』第5号, p. 2頁参照(初出は『未来』150号、1979年3月)。

¹⁵ 송효순(1982년8월)『서울로 가는 길』형성사. なお、翌83年の10月に日本語訳が出版された。宋孝順著、劉光石訳(1983)『ソウルへの道—韓国女子労働者の現場手記—』教文館。これは忠清南道論山郡の小さな山あいの部落で8人兄弟の5人目として生まれた宋孝順が、たった6年間の義務教育である国民学校(日本の小学校に相当)しか学ぶことができずに15歳という年齢で兄弟に送金するためソウルへ上京し、化学工場で女性労働者として、そして民主的に作られた労働組合の代議員としても成長していく現場手記である。手記の後半には組合活動に対する会社側の執拗な弾圧、それに対し都市産業宣教会を通じて絆を深めた女性労働者相互の同志愛による連帯と抵抗が具体的に描かれ、最後は1980年12月に彼女が解雇されたところで終わっている。

¹⁶ 梶村秀樹(1995)「《書評》宋孝順著『ソウルへの道』」『朝鮮を知るために』明石書店, p. 199(初出は1984年1月)。

から、私たちがその中にいて空気のようにあたりまえと思っている「日本的」な生活のありかたを、距離をおいてみつめることに通じていける¹⁷。

梶村によると、日本人が朝鮮語を学ぶことは朝鮮人と関係をもつうえで「日本語とそれにつきまとう独善」を克服し「真のつきあい」をするために必要である。朝鮮語を学ぶことで、「朝鮮人の思いを内側から感じとり」、その結果として日本人が前提にする『『日本的』な生活のありかた』を相対化することが少しでも可能になるからである。

重要なことは、朝鮮語を獲得する手段を奪われてきた在日朝鮮人2世、3世の状況に対し、日本人として何をなすのかという問いに答えている点である。すなわちそれは、植民地支配以来行なわれてきた朝鮮人からの朝鮮語の収奪とは180度真逆の行為であり、日本人が朝鮮語を学び、そして朝鮮語を学ぶ環境を在日朝鮮人に「返す」という主体的行動である。金嬉老が日本社会で朝鮮人としての主体性をつかみ損ねていたことが事件の背景の一つとなっていることを考える時、金嬉老を含む朝鮮語を話せない在日朝鮮人に朝鮮語を「返す」ことで、在日朝鮮人が朝鮮人としての主体性を回復する契機をつかむことにつながる。そうした行動をしていく場として、現代語学塾を位置づけることが可能である。

V. 「朝鮮語で語られる世界」から「日本語で語られる世界」を射抜く

梶村が書いた論考に「기생(妓生)・キーサン・Kiseng」というものがある¹⁸。ここで梶村は、朝鮮の伝統社会における妓生のイメージと日本でのそれとを明確に対比する。

すなわち、三・一運動時のデモで先頭に立った事例をあげ妓生は朝鮮社会の諸階層の中でも「もっとも強い民族意識・抗日意識の伝統」を継承した存在であると説く。女性と学問とは無縁とされてきた伝統社会の中で妓生は自他ともに認める「知性と文化のエリート」であり、窮屈な儒教道徳と自由を希求する人間性との矛盾克服の体現者ともされたという。民衆にとっての妓生は「人間的な美徳を象徴する偶像」でもあり、『春香伝』などの民間伝承にもそういう姿として登場する、としている。朝鮮語の勉強会で晋州の妓生である論介の物語を読み終えたことに触れ、論介が秀吉の朝鮮侵略の際に占領軍大将を南江にのぞむ絶壁に誘い命がけで大将を殺した伝説、そしてこの絶壁を「義岩」と名づけていることを紹介し、これを「朝鮮側からみた「壬辰倭乱」像」であると指摘している。

一方で植民地支配期の旅行案内書にでてくる「きいさん」のイメージは、「支配者の意のままになるちょっとこっけいなおもちゃ」としか映っておらず、日本人旅行客の「トロンとした目」は妓生の心の中を見通すことができなかったし、しようとしなかったと批判する。そして戦後キーセン観光に出かける「倭奴」の認識は、まさにこのイメージの継承者だと批判している。妓生の「心」が見えない鈍感さが、はずかしくてならず、「いいかげんに、われわれは気づかなければならない」と締めくくっている¹⁹。

¹⁷ 梶村秀樹(1989)「朝鮮語と日本語あれこれ」、「故梶村秀樹先生をしのぶ市民の集い」実行委員会編、前掲書、p. 93. この文章はもともと神奈川大学朝鮮語講座の有志発行のパンフレット『동무』に掲載するため1978年に書かれたが、『동무』の掲載予定号が遅れたため、未発表原稿となった。

¹⁸ 梶村秀樹(1974年4月)「기생(妓生)・キーサン・Kiseng」キーセン観光に反対する女たちの会発行『キーセン観光 資料・性侵略に反対する』。これは主として1970年代以降に日本人の会社員が中心となり韓国への買春旅行を行ったいわゆる「キーセン観光」に反対するため、「キーセン観光に反対する女たちの会」が1973年からはじめた反対運動の記録と著名人の論考を集めたパンフレットである。

¹⁹ 以上、引用を含め梶村秀樹(1974年4月)「기생(妓生)・キーサン・Kiseng」, 前掲書, pp. 36-37.

この文章からは、梶村が「朝鮮語で語られる世界」に触れることで会得した抗日意識にあふれる「人間的な美德を象徴する偶像」たる妓生イメージを、植民地支配によって強化された民族差別・女性差別の極致としての日本人旅行者の行動、およびキーセン観光に出かける日本人男性会社員の破廉恥で鈍感な視線と対比させ後者を批判している。「日本語で語られる世界」における「きいさん」の姿は妓生の姿とはグロテスクなまでにイメージが改ざんされ、「倭奴」による性暴力を助長し正当化し、差別を固定化するものである。それゆえに「はずかし」いのである。つまり梶村は妓生のイメージを通じて、植民地支配の歴史により強化された、自身を含む旧宗主国の男性性とその暴力性を批判している。

「日本語で語られる世界」に安住する限りこうした批判的観点はほぼ出てこない。「朝鮮語で語られる世界」への接触は、「日本語につきまとう独善」を解体する原動力たりうる。

このような梶村による日本社会批判の論法は、多分に内在的発展論の論法と類似している。第一に、朝鮮社会にあった事実がもつ積極的なイメージを、停滞論や他律性史観など日本社会における朝鮮社会のイメージに対置させることで、その非実証性およびイメージの歪みを批判する論法のスタイルをとっているためである。そして第二に、梶村のいう「朝鮮語で語られる世界」をつかみとるという営為そのものが、無数にあった／ある朝鮮人の主体的な有様(李相旭(2023))を幾分かでも内在化していくということである。日本人が朝鮮人の主体性を朝鮮語を通じて幾分かでも内在化することで価値観、感性、歴史観などの変化を起こし、変化した目で改めて日本社会をみていくことで、その歪みをよりリアルに浮き彫りにできるという構図が見てとれる。それは、内在的発展論が依拠する視角を、朝鮮語の獲得による「朝鮮語で語られる世界」の会得を通じて内在化していく一連の行為と考えることも可能である。

VI. おわりに

梶村秀樹と現代語学塾との関わり、朝鮮語学習の意味やその射程についてみてきた。金嬉老公判対策委員会があったことで生まれた現代語学塾に、梶村はその発足から生涯関わり続けた。現代語学塾と関わる中から、朝鮮語学習を通じて朝鮮人が主人公である「朝鮮語で語られる世界」を獲得する実践を梶村は行っていた。そして塾生と共同でその世界に触れることを梶村はライフワークとしていた。さらに「朝鮮語で語られる世界」から日本社会、「日本語で語られる世界」を射抜く作業を梶村は日本社会批判として遂行していった。

参考文献

송효순(1982)『서울로 가는 길』ソウル:형성사

『글방—塾報—』

『金嬉老公判対策委員会ニュース』

「第三章 年譜」(1990)梶村秀樹著作集刊行委員会編『梶村秀樹著作集 別巻 回想と遺文』東京:明石書店

梶村秀樹(1974)「妓生(기생)・キーサン・Kiseng」キーセン観光に反対する女たちの会編『キーセン観光 資料・性侵略に反対する』キーセン観光に反対する女たちの会

梶村秀樹(1992)「朝鮮語で語られる世界」(初出1975年)『梶村秀樹著作集 第1巻 朝鮮史と日本人』東京:明石書店

梶村秀樹(1989)「朝鮮語と日本語あれこれ」(初出1978年)「故梶村秀樹先生をしのぶ市民の集い」実行委員会編『追悼・梶村秀樹さん』東京:ジェルワードシステム／文栄

梶村秀樹(1995)「書評:宋孝順著『ソウルへの道』」(初出1984年)『朝鮮を知るために』東京:明石書店

三橋修(1989)「金嬉老公判対策委員会の中で」「故梶村秀樹先生をしのぶ市民の集い」実行委員会編『追悼・梶村秀樹さん』東京:ジェルワードシステム／文栄

山本興正(2025)「人間性回復のための朝鮮語学習:現代語学塾小史」『思想史研究』第32号, 思想史・思想論研究会

李相旭(2023)「姜徳相先生の思い出」姜徳相先生追悼文集刊行委員会編『追想 姜徳相先生』東京:特定非営利活動法人 文化センター・アリラン

宋孝順(著)劉光石(訳)(1983)『ソウルへの道—韓国女子労働者の現場手記—』東京:教文館

沈熏(著)梶村秀樹・現代語学塾常緑樹の会(訳)(1981)『常緑樹』東京:龍溪書舎
倉橋葉子氏へのインタビュー(2021年9月15日実施, 2024年4月25日実施)

米津篤八氏へのインタビュー(2021年12月31日実施)

安岡千絵里氏へのインタビュー(2022年3月13日実施)

竹川真理子氏・大石文雄氏へのインタビュー(2022年4月4日実施)

谷口豊氏・権丈眞弓氏へのインタビュー(2022年4月5日実施)

[Panel 3-3]

한국 일본식민지시대 건축물의 자원화와 재이용: 배경과 구·
동양척식주식회사 사례 분석

**A Study on the Resourceization and Reuse of Buildings
during the Japanese colonial period in Korea: An
Analysis of the Background and Former Oriental
Development Company**

韓国における日本植民地時代の建築物の資源化と再利用: 背景と
旧東洋拓殖株式会社の様相の分析

오타 히나노

Hinano Ota 太田 ひなの

도시샤대학

Doshisha University 同志社大学

要旨

植民統治は清算すべき過去であると同時に、それがもたらした弊害は、人類が同じ過ちを繰り返さないよう、後世に継承されるべき遺産でもある。記憶を再構成し、次世代へと継承する媒体の一つである植民統治期の建造物は、あらゆる時間軸を含み込んだ形で人々の生活圏に今も存在し、人々はその存在を通して過去を直観的に想起させられる。そのため、植民地遺産をいかに現代で表現するかという問題は、人々の歴史認識に大きく関わる問題である。

韓国においての日本統治時代の建造物は、保存か撤去かを巡る激しい議論が行われその多くが失われてきた。しかし、2010年代以降、地方都市を中心に、残存する日本統治時代の建造物を地域の「資源」として積極的に活用しようとする試みが顕著になってきた。この「資源化」に伴い、建造物がいかなる文脈で再構築、表現されるのか、議論を試みたい。この問いを探るため、本発表では主に、植民統治遺産が「資源化」されるようになった要因と、植民統治政策推進のための公的機関である東洋拓殖株式会社の建築物の再利用例を考えたい。

キーワード:植民地建築、近代文化遺産、再資源化、東洋拓殖株式会社、負の遺産

초록

식민통치는 청산해야 할 과거인 동시에 그것이 가져온 폐해는 인류가 같은 잘못을 되풀이하지 않도록 후세에 계승되어야 할 유산이기도 한다. 기억을 재구성하고 다음 세대로 계승하는 매체의 하나인 식민통치기의 건조물은 모든 시간축을 포함한 형태로 사람들의 생활권에 지금도 존재하며, 사람들은 그 존재를 통해 과거를 직관적으로 상기시킬 수 있다. 그래서 식민지 유산을 어떻게 현대적으로 표현할 것인가 하는 문제는 사람들의 역사인식에 크게 관련된 문제이다.

한국에서 일제강점기의 건축물은 보존이나 철거냐에 대한 격렬한 논의로 대부분 사라졌다. 그러나 2010년대 이후 지방 도시를 중심으로 잔존하는 일본 통치 시대의 건조물을 지역의 '자원'으로 적극적으로 활용하려는 시도가 현저해졌다. 이 「자원화」에 따라, 건조물이 어떠한 맥락에서 재구축, 표현되는지, 논의를 시도하고 싶다. 이 물음을 살펴보기 위해 본 발표에서는 주로 식민통치유산이 '자원화'되게 된 요인과 식민통치정책 추진을 위한 공적기관인 동양척식주식회사 건조물의 재사용 예를 생각하고자 한다.

키워드: 식민지 건축, 근대문화유산, 재자원화, 동양척식주식회사, 부의 유산

I. 研究の背景と先行研究

植民統治期の建造物は抑圧的な歴史を想起させる存在であり、歴史資料としての価値もあり、解放後の扱いは常に複雑である。韓国では日本による植民地時代の多くの建造物が論争の末に消えてきた歴史があるが、2000年代以降に残存する建物を地域の「資源」^[1]として再構成しようとする試みが目立ってきた。しかし、日帝の残滓として清算しようとする動機は依然として存在し、清算しなければならないという意識と資源化の間には緊張関係が発生する。本研究は韓国で日本による植民地時代建造物がなぜ、どのように「資源」となったのか、また、その再利用^[2]は時代の変化や運営主体によってどのように異なるのか、明らかにする。

本研究は以下の先行研究に基づいている。一つに松井理恵(2022)は、大邱の市民団体の日本式家屋保存活動を分析し、日本建築が地域文化を構成する要素として再認識されていると結論付けた^[3]。本研究は運動に到った社会的背景を概観するとともに、松井の注目した「保存」の動きの先にある再利用方法に着目する。第二に、金賢貞(2019)は植民統治機関の建物を再利用して運営される木浦近代歴史館の保存過程と展示を検討している^[4]。문예은(ムン・イエウン)(2011)は近代文化遺産に対する観点を「民族主義論」「歴史主義論」「文化消費論」に分類し、その競争を分析している^[5]。本研究では、金のインタビューをもとに、保存に反対する論理が果たして全て「民族主義」なのかという点を検討したい。

II. 文化財制度と建造物の「資源」化の論理

日本による植民地時代建造物の資源化の背景には、どのような社会変化があったのだろうか。1963年に日本の文化財保護法を借用して文化財法が制定された当時は、近代建築物が文化財として保護対象になることは珍しく、これを問題視した文化財庁は2001年3月に「開化期」から「解放前後」までの近代建築物と記念物を保護するための登録文化財制度を導入し、文化財保護法を改正した。その結果、「指定文化財ではない建造物または記念になるような施設物形態の文化財の中で保存および活用のための措置が特に必要なもの」^[6]を文化財として登録し、より緩和された保護措置を講じることで所有者の自主的な保全姿勢に期待ができるようになった^[7]。この条約改正が植民統治期の建築物を含む近代建築物が資源化されるようになった直接的な契機と見る事が出来る。

では、近代建築物の価値が放置される状況を文化財庁に問題視させた要因は何か。一つに、それらが地方自治体の競争力として認識されていった点がある。문예은(ムン・イエウン)(2011)によると、2000年代以降、「地方自治体の実施による地域の文化観光開発が地域の競争力強化と発展の手段として急浮上」^[8]したとしているが、遡れば、韓国でIMF経済危機を契機に1997年以降加速した、新自由主義的な観光開発概念が影響している。新自由主義では国家に代わって市場自体が経済を調整する役割を担い、企業や地方自治体は利益を極大化するために経営権力を行使する^[9]。文化財庁は、比較的自由に活用戦略を採れる文化財保存の枠組みを設けることで、地方自治体による自発的な保全と観光開発推進を促したと見られる。

第二に、日本の団体による歴史歪曲の危機に面したことで、文化財を歴史教育に活用す

る必要性が意識されたという要因が考えられる。2000年8月、「新しい歴史教科書をつくる会」^[10]の製作した歴史教科書が日本の中学校教科用図書検定に合格する可能性が知られると、「日帝時代に建物と抗日闘争遺跡地を保存、日帝侵奪の生きた教育場にしようとする努力」^[11]の必要性が叫ばれ、当時の建造物が残る地域でそれがなされた。日帝の痕跡を清算し、忘れることで乗り越えるよりも、むしろその収奪性を象徴する形で再整備し、忘れないことで歴史歪曲という現在的な危機に対抗する必要性が意識されたということである。このような日本の状況も、観光開発に寄与する意図と共に建造物の保全論理を後押しした可能性が考えられる。

Ⅲ. 建造物の再利用の事例:東洋拓殖株式会社

日本による植民地時代の建造物は開港場や在朝日本人の拠点都市とされていた地域に多く建てられ、その一部が現在も残存している。国家登録文化遺産は現在977件が近代文化遺産として登録されており^[12]、登録の如何に関わらず、その用途は多様に存在する。例えば建築の異国的感性を利用した飲食店や売店、建築の堅固性や規模の大きさを利用した博物館や資料館、銀行や教育施設などがあるが^[13]、今回は、韓国内3か所に残る東洋拓殖株式会社(以下、東拓とする)の建物の例を通し、同じ目的の建築でも、再利用に到る文脈や戦略が異なるようすを概観したい。

東拓は、移民事業や朝鮮半島に入植した日本人への融資、不動産経営などの事業を通し、日本に有益な植民統治を行うための国策会社であり、1908年に制定された拓殖法に基づいて設立された^[14]。朝鮮半島には首都京城を中心に9つの支店が存在し、どれも西洋風の豪華な建築様式を有した^[15]。朝鮮人からは時に植民統治機関として反感を買い、後述する爆破事件などが起きることもあった。

現在、建物に外装・内装を含め大幅にその姿を変えことなく現在も残存するのは、釜山・木浦・大田の3か所である。それらについて、以下に概観したい。

1. 東洋拓殖株式会社木浦支店-「木浦近代歴史館2館」

金賢貞は、東拓木浦支店の保全活動を行ったチェ・ソンファン(최성환)教授^[16]にインタビューを実施し、これによれば東拓の建物は民主化運動の時は戒厳軍が掌握していた過去があり、住民には気味の悪い場所として記憶され、1999年には「「居住環境改善」のために撤去してほしいという近隣住民の要請」があり、建物を所有した国防部は崩壊の危険性を理由に撤去を決めたという^[17]。しかし、「近代文化遺産を活用して地域の新しい文化観光商品として開発することがより積極的に模索されなければならない」^[18]という理念の保存運動の末、「木浦近代歴史館2館」として生まれ変わった。これは、必ずしも撤去を望む見解を「民族主義論」で、保存を望む見解を「歴史主義論」では説明がつかないことを意味する。

「木浦近代歴史館2館」の展示は「1階に木浦近代史、2階に国家レベルの近代史と日本帝国の戦争に関する写真」が展示され、2階の展示は前述した教科書問題の影響を特に受けており、「日本が否定しようとする加害の歴史に対するアンチテーゼとして被害の歴史を強調する傾向」が現れた^[19]。さらに、金の現地調査から5年余りが経った2025年現在は、展示がさらに変化した。1階の東拓の倉庫だった部分に新設された「今日はあなたが

義血団:東拓に爆弾を投げろ!」という体験展示コーナーは、東拓の建物を模したイラストがプロジェクターで壁に映し出され、子供たちがイラストに向かってボールを投げると、当たった部分が燃えるようなグラフィックに変わる仕掛けになっていた。これは、1926年12月に発生した、独立運動家の集団である義烈団のメンバー羅錫疇が、東拓や朝鮮殖産銀行に手榴弾を投げ入れ、従業員や警官を殺害し、自殺した事件の展示が側にあることから、この事件をイメージしたものと思われる^[20]。

このように、展示で「被害の歴史」「抵抗の歴史」を強調することで、東拓木浦支店の建物は日本の収奪の貴重な証拠であり、学習の場として認識され、存続することができている。それは歴史歪曲に抗する手段であると同時に、経済発展に比較的疎外された地域であった全羅道の、さらに人口減少の進む原都心という場所において、生きている人々の生活を豊かにするための売り物でもあるのである。

2. 東洋拓殖株式会社大田支店 - 「HEREDIUM」

同じ東拓の大田支店の場合、解放後に通信庁、電信電話局などとして使われ、2021年にエネルギー供給会社を買収^[21]、2023年にHEREDIUMというアートギャラリーとして開館した。記者の「日本帝国主義の残滓は撤去するのが正しいという意見もありますが(どう思いますか)」という旨の質問に対し、ファン・インギョ理事長は「大田東拓は1922年に建てられ、100年以上の歴史を持つ空間です。その中で日本人が使った時間は1945年光復の時まで23年程度です」と答え「傷だけにこだわらず発展の動力にすること」が重要だという見解を示した^[22]。

HEREDIUMの最初の展示『仁洞100年:歴史になる(인동 100년: 역사가 되다)』では、HEREDIUMが位置する仁洞地域で起こった1919年3月1日の万歳運動を中心に、東拓の歴史や建築的価値を紹介した^[23]。そして2024年には、日本出身の現代美術作家であるイケムラレイコの展示会が開かれた。日本の作家展を開催するのに悩みながらも、「未来へ進む動力」^[24]と考え開催を決心したという。2025年に開催された『ヘレディウムシリーズ: DittoとVeto(헤레디움 시리즈: 디토와 비토)』は、「現代社会と人間疎外」、「歴史とアイデンティティの交差点」、「個人の経験と社会的偏見」など、現代社会の葛藤と論争を他のテーマに対する多様な価値観を作品を通じて表現し、対話と考察の場を提供することを目標にした展示であった^[25]。人々は自由に会話したり、美術作品の前で写真を撮ってSNSにアップロードするなど、各々の時間を過ごしていた。展示準備期間には多くのスタッフと見られる若者が集まっていた。

これから分かるように、木浦の東拓とは異なり、大田の東拓は民間企業の手に移ったからか、訪れる人々に自由な討議と思索を任せる開放的な文化空間としての性格が大きく見える。HEREDIUMのファン理事長は、「発展への動力」をキーワードに、人々の創造的なエネルギーを展示を通して生むことを重要視しており、東拓の建築物を箱として利用することで、このまちの過去を乗り越え、未来へ繋げるという意図を表現していると思われる。

3. 東洋拓殖株式会社釜山支店-釜山近現代歴史館・別館

釜山の東拓は、2023年より釜山近現代歴史館別館として開放されている。館内の展示によれば、建物は解放後に米軍政が引き取った後、1949年に釜山米国広報院(のちに米国文化院と改称)がおかれ、市民の積極的な返還運動の末に1999年に釜山市に返還さ

れた。復元後、2006年からは釜山近代歴史館という博物館として活用されていたが、「現都心の複合文化空間として新しく生まれ変わるため」に2021年より休館し、2023年からは隣の旧韓国銀行釜山本部を本館とする釜山近現代歴史館に付属する別館として再開館した^[26]。この別館は、図書館・記録館・博物館機能を持ち、1階部分に図書館が、2階部分に東拓の建物の沿革についての展示と、釜山近代(近現代)歴史館のデジタルアーカイブを見ることができるデバイスが設置され、豊富な閲覧スペースを多くの市民が利用していた。デジタルアーカイブでは、東拓の成立や、移民・拓殖・投資など各事業の運営について、新聞資料や写真資料を用いて詳細に知ることができる。

この施設形態は館内展示では「Lerchiveum」という言葉で表現されているが、これは図書館(Library)・アーカイブ(Archive)・博物館(Museum)の3つの単語が組み合わさった単語であり、複合文化空間を意味する。つまり、歴史博物館から、より包括的な役割を持ち、文化的な「釜山」を象徴する、人々の拠点として再誕生したのである。このような、博物館から複合文化空間への再誕生は、一方で、収奪性や民族の反抗の歴史を覆い隠す、歴史的文脈の毀損であり、建物は保存されていても、建物の文脈は保存されていないと考えることもでき、こうした近代建築を複合文化空間としてより生産的に活用するための方法が近年議論されている^[27]。

IV. 結論と研究の課題

3つの東拓が再利用された時期を比較すると、木浦近代歴史館2館および、今はない釜山近代歴史館が2006年に、現在の釜山近現代歴史館・別館と、HEREDIUMが2023年に開館しており、この間に17年あまりの差がある。この期間に、2000年代初頭に近代文化遺産として資源化された植民地期建造物は、時代に合った利益極大化のために再利用され、より複合的な機能を持つ地域拠点として変化したことが見て取れる。鄭・須山(2008)は、一般的に韓国の植民地時代の建築は、日本建築に比較して西洋建築は肯定的に見られ、日本を直接的に想起させない形で「記憶の戦略」がとられるとしたが^[28]、その活用戦略は運営主体やその意図、社会的状況によって大きく異なってくると言えよう。

また、建物の撤去を主張する論調を、「民族主義論」という言葉で説明することの問題点についても考えたい。民族対民族の闘争という二項対立的な構造を前提に、植民統治政策や、反植民統治運動を捉え、そこから独立した国民国家のあり方を模索することがこの「民族主義」だとすれば、当時の建造物を撤去しようとする動機と「民族主義」は、木浦近代博物館の事例を見れば明らかなように、必ずしも連動しない。むしろ、展示の内容に民族を中心単位とする捉え方が表象されることがある。こういった、認識と実態の齟齬は、解放後の建造物の扱い方を、「保存／撤去」という二文法的構造で捉えてしまうことに起因する。「複合文化空間への再誕生か、歴史的文脈の毀損か」という論争からも、建物の「保存／撤去」という枠組みは、この問題を把握するには不十分であることが分かる。重要なのは、資源化と再利用はすべてその地域で現在を生きる人々のための施策なのであり、その意図をどう表現するかということである。

以上の結論を踏まえ、今後は、近代建築物の再利用が、今を生きるあらゆる世代の人々に与える経済的影響や、歴史認識に与える影響をさらに調査したい。

[1] 金賢貞(2017)2頁によれば、「資源」は本源=ソース(source)とは異なり、人間の欲求と利用能力によって生

み出されるものであり、「資源化」とは、ソースが発見・活用されることによって資源(resource)となるものであるという。

[2] ここで再利用は、RhanSeeCHUA、DEGUCHI(2011:779)によるとアダプティブ・リユース(Adaptive reuse)とも呼ばれ、建物を修繕または改装し、元の設計とは異なる新たな目的で使用することを意味する。

[3] 松井理恵(2022)「大邱の敵産家屋:地域コミュニティと市民運動」共和国, 1-248.

[4] 金賢貞(2019)「ポストコロナル都市と歴史の資源化:韓国木浦市における日本式建築物の保存と「木浦近代歴史館」」『亜細亜大学国際関係紀要』29(1), 1-53.

[5] 문예은「근대문화유산을 둘러싼 담론의 경쟁 양상 분석:군산시를 중심으로」지방사와 지방문화 14(2), 2011, 265-305쪽.

[6] 韓国 法制処 国家法令情報センター「문화재보호법」2001.3.28改訂 (URL: [https://www.law.go.kr/법령/문화재보호법/\(06443,20010328\)\)](https://www.law.go.kr/법령/문화재보호법/(06443,20010328)))2025.1.12閲覧

[7] 문화재청「근대문화유산 보존을 위한 등록문화재제도 안내」2001年、5頁.

[8] 문예은上記論文、271頁.

[9] 1997年東南アジアで起きた経済危機は韓国にも波及し、IMF救済プログラムが樹立された。韓国政府はIMFと世界銀行に新自由主義社会構造改革を要求され、これを推進した。申光榮(2009)100-103.

[10] 1998年発足。「これまでの教科書が日本を不当に悪く描いていたものを直す」べきだとして教科書作成を行い、2001年4月に歴史と公民教科書が文部科学省検定に合格。教科書作成のほか、「従軍慰安婦」「南京大虐殺」などを歴史歪曲とする調査活動も行っている。公式HP(URL:<https://tsukurukai.com/>)2025.7.31閲覧

[11]《국민일보ON》일제침탈 항일투쟁 유적지 克日코스로 복원 봄. 2001.8.14.(URL: <https://www.kmib.co.kr/article/viewDetail.asp?newsClusterNo=01100201.20010814000002901>)2025.7.31.閲覧.

[12] 한국 국가유산청 국가유산포털 (URL:<https://www.heritage.go.kr/main/?v=1752508994535>)2025.7.15.閲覧

[13] 同上.

[14] 東洋拓殖株式会社「東洋拓殖株式会社30年誌」1939年, 2-10.

[15] 同上.

[16] 運動当時、木浦文化院の職員で、現在の木浦大学史学科教授。

[17] 金賢貞(2019)20-21,《남부일보ON》동양척식주식회사 목포지점 건물 철거 여부 놓고 논란. 1999.8.11.(URL:<http://www.namdonews.com/news/articleView.html?idxno=562>)2025.8.1.閲覧

[18] 金賢貞(2019)24.

[19] 金賢貞(2019)39.

[20] 金榮範ほか「신편 한국사48: 임시정부의 수립과 독립전쟁」국사편찬위원회、2002年、3.3, 2), (1)(URL:<https://db.history.go.kr/diachronic/level.do>)2025.9.2.閲覧

[21]《한겨레신문ON》수탈의 상징' 동양척식회사 건물, 문화예술 공간으로 탈바꿈. 2022.12.29. (URL: <https://www.hani.co.kr/arti/area/chungcheong/1073720.html#ace04ou>)2025.8.1.閲覧

[22]《중앙SUNDAY》“문화공간 된 일제 수탈 상징...’아름 잊지 않되 미래동력으로. 2024.4.24. (URL:<https://www.joongang.co.kr/article/25240664>)2025.7.14.閲覧

[23] HEREDIUM公式HP (URL:<https://heredium.art/exhibition/6?end=true>)2025.8.1.閲覧

[24] 注20記事。

[25] 注18、《동아일보》현대미술 거장들의 대화, 헤레디움 두 번째 시리즈 ‘디토와 비토’. 2025.3.18.(URL:<https://www.donga.com/news/Culture/article/all/20250310/131174157/1>)2025.8.1.閲覧.

[26] 釜山近代歴史館・別館館内展示を参照。

[27] Hyun Kyung Lee(2023)など。

[28] 須山聡・鄭美愛(2008)「韓国における植民地都市景観の無国籍性:群山・木浦市を中心に」『駒澤大學文學部研究紀要』66, 24.

参考文献

《국민일보ON》일제침탈 항일투쟁 유적지 克日코스로 복원 봄. 2001.8.14.

국사편찬위원회, 신편 한국사48:임시정부의 수립과 독립전쟁, 2002.

김영규 「한국과 일본의 문화재 보호정책 비교연구」. 한국지역혁신논집4(2), 2009, 79-107쪽.

《남부일보ON》동양척식주식회사 목포지점 건물 철거 여부놓고 논란. 1999.8.11.

《동아일보》현대미술 거장들의 대화, 헤레디움 두 번째 시리즈 '디토와 비토'. 2025.3.18.

문예은 「근대문화유산을 둘러싼 담론의 경쟁 양상 분석:군산시를 중심으로」지방사와 지방문화14(2), 2011, 265-304쪽.

《한겨레신문ON》'수탈의 상징' 동양척식회사 건물, 문화예술 공간으로 탈바꿈.
2022.12.29.

《중앙SUNDAY》“문화공간 된 일제 수탈 상징...’아픔 잊지 않되 미래동력으로.
2024.4.24.

Hyun Kyung Lee (2023) “Beyond “imagined” nostalgia: Gunsan’s heritagization of Japanese colonial architecture in South Korea” International Journal of Asian Studies, 20, 91-113.

Rhan See CHUA, Atsushi DEGUCHI (2011) “TOURIST-DEPENDENT ADAPTIVE REUSE IN THE OLD RESIDENTIAL QUARTER OF MELAKA CITY, MALAYSIA: マラッカ市旧市街地における観光依存型建物再利用に関する研究” 日本建築学会計画系論文集 76(662), 779-787.

東洋拓殖株式会社『東洋拓殖株式会社30年誌』1939年。

松井理恵『大邱の敵産家屋: 地域コミュニティと市民運動』共和国、2002年。

伊藤隆敏(1999)「アジア経済危機とIMF」『経済研究』50(1), 岩波書店, 68-93.

金賢貞(2019)「ポストコロニアル都市と歴史の資源化: 韓国木浦市における日本式建築物の保存と「木浦近代歴史館」」『亜細亜大学国際関係紀要』29(1), 1-54.

申光榮(岸裕太訳)(2009)「〈訳文〉韓国におけるグローバリゼーションと社会的不平等」『立命館大学人文科学研究紀要』92, 93-118.

須山聡・鄭美愛(2008)「韓国における植民地都市景観の無国籍性: 群山・木浦市を中心に」『駒澤大学文学部研究紀要』66, 19-45.